大学体育研究　13：15－33，1991

筑波大学生の価値類型とその特徴に関する調査研究

伊藤　信之，齊藤　隆志，嵯峨　寿，柵木　聖也

An investigation on the value styles and sport styles of the students in Tsukuba University

Nobuyuki ITO, Takashi SAITOH,
Hitoshi SAGA and Seiya MASEGI

Abstract

Life styles and values of people have been focused on the area of consumer behavior science. Life styles and values are the some of the most fundamental factors which have a great influence on the style of decision making, behavior or response. The variables on life styles and values sre recognized as the effective variables which explain the consumer behavior as well as the demographic factors such as sex, age, income or academic background.

In this investigation, the life style and value approch were adopted to seize the students' sport style such as sense of sport, sport behavior, response to the general physical education regulation and the needs for the physical education system. These date were collected by the questionnaires distributed to all of the students who take general physical education classes in Tsukuba University. 7595 of questionnaires were distributed, and 4014(52.9%) were returned for the period of December 1989.

Factor Analysis Method analyzing the Twenty-eight value items found 9 factors of value. 7 value types were found by the Cluster Analysis and all of 4014 studends are categorized into one of the 7value types. Three types in sevens had sport oriented values higer than any other four types. Total percentage of this three types was 52.6%. One of these three types was named as "Sport tough"(19.0%), which was the highest percentenge on the entering some sport clubs. In this types, sport was shown as important position on thire life. "Sport-Study balanced"(16.2%) accepted the all benefits of the sport activities. "College life enjoying"(17.4%) had an interesting in the fashion strongly as well as in sport, and especially they made much account of joyfulness in sport activities.

Physical education programs should be developed on the basis of thses market oriented investigation.

Ⅰ．緒　言

1．研究の動機

筑波大学生は体育の授業やスポーツ活動に対してどのような見方，関わり方をしているのであろうか。こうした問題にアプローチした研究はこれまでも多くあった[3)4)5)6)7)8)]。そして，それらのほとんどは或る被説明変数―もちろんそれは「正課体育の必修制に対する意見」「正課体育の意義」「正課体育の授業時間への意見」といったような体育やスポーツに関する意識や行動の変数であるが―を説明（規定）する変数（説明変数）として用いているのが宇土の運動生活の８類型[2)]ないしそれを加工したカテゴリーである。クラブに所属して運動しているのか（C運動者），競技会やスポーツデーなどの運動プログラムに参加しているのか（P運動者），運動場やグラウンドなどのスポーツ施設を個人的に使って運動をしているのか（A運動者），これら３項目の質問への「はい・いいえ」の組み合わせが２×２×２で合計８通りあり，これが運動生活の８類型である。そして，学生をこの８類型に分類して，類型毎に体育やスポーツに関する意識・行動の特徴をみていこうとするものである。

これらの研究は，学生の運動生活が体育の授業の見方や感じ方に関係があることを明らかにしてきた。しかし，その分析枠組上当然であるが，そもそも何故クラブに所属しているのか，何故プログラムに参加するのかといったことの解明には貢献できない。この点を克服し，運動者行動や運動生活を決定づける要因を探る研究が消費者行動研究の成果を応用した形で，体育学の分野でも近年試みられてきている。

消費者行動論の中で特に価値観類型論に焦点をあててみると，商品の購買・使用の説明変数として，生活の信条，方針ともいえる「価値観」を取り上げ，消費者を価値観の似た者同士をグループ化し，そのグループ（タイプ）別に商品の購買・使用のパターンを明らかにする分析手法が採用されるようになっている。当然この場合，価値観のタイプが異なれば，商品の購買・使用パターンにも差異が生ずることが仮定されているのである。同じ商品でも人気，不人気があるし，同じ機能であってもデザインによって売行きが違ったりと，作れば売れた大量生産・大量消費の時代には経験しなかった事態がこうした分析手法によって解明されることで，商品の企画や開発，販売や広告など，企業のマーケティング活動の効率は向上した。

人生80年時代を迎え，自由時間が労働時間の３倍にも達しようとしている今日，生涯にわたる学習の必要性は一層高まるであろうし，その中でもスポーツは今や人々のライフスタイルの核になりつつある。こうした社会状況の変化を見渡すとき，生涯スポーツの教育機関のひとつである大学においても，マーケティング的思考が必要とされるのではないだろうか。

2．研究の目的

筑波大学生は，体育の授業に対して，あるいはスポーツに対してどのような見方，考え方をしているのか，また，スポーツには実際どのような関わり方をしているのかを，正課体育の受講に対して行われたアンケート調査によって得られた結果をもとに明らかにしていく。その際に，筑波大学生を価値観の違いによっていくつかの類型（タイプ）に分類して，それぞれの体育・スポーツ観や関与形態の特徴を明らかにしていくのが本研究の主題である。

3．研究の方法

（１）分析枠組

「十人十色」という言葉があるように，人間の価値観には一人ひとり個性があって，そ

れはその個人を本人たらしめている特徴であり，他人とを区別する際の指標でもある。ただ，価値観がこのように自己完結的であると知っても，一方では，「類は友を呼ぶ」という言葉があるよう，人々の間には何らかの共通した考えを持っていたり，似たような行動をとったり，あるいは，ある刺激に対して同様な反応を示す者がいることも否定できない。

こうした見地から，筑波大学生の価値観の類似性や差異性に着目してタイプ分けを試み，各タイプ毎の人口統計学的属性や，体育の授業やスポーツに関する行動様式，思考様式，反応様式の特徴を素描する。人口統計学的属性としては，「性別」，「学年」，「学類(群)」の3項目，行動様式としては，「スポーツ関連のクラブ，サークルへの所属率」，思考様式としては，「スポーツ観」，「正課体育の授業観」，反応様式としては「正課体育の授業への要望」を取り上げる。

（2）調査項目の内容

まず，価値観の類型化を図るために，これまでの先行研究[1)]によって得られた項目を参考に作成した項目群（アンケート調査票ⅠのQ3）によって測定し，各タイプの行動・思考・反応様式については，アンケート用紙の次のような7項目によって測定した。

行動様式については，

「スポーツ関連のクラブ，サークルへの所属率」（同ⅡのQ3）

思考様式については，

「スポーツ感（スポーツで過ごす時間）」（同ⅡのQ5）

「正課体育の授業の必要性」（同ⅢのQ2－1）

「正課体育4年間必修制への賛否」（同ⅢのQ2－5）

反応様式については，

「正課体育が必修制から選択制へ移行した場合の受講希望」（同ⅢのQ2－18）

「能力別コース設置希望」（同ⅢのQ4－2）

「各種スポーツコースへの参加希望」（同ⅢのQ5）以上5項目である。

（3）調査の概要

アンケート調査の概要は以下に示す通りで，使用したアンケート調査票は本巻末尾に掲載したものである。

調査対象	筑波大学正課体育の受講生　7,595人
有効標本数	4,014人（回収率　52.9%）
調査方法	留置調査法
調査時期	平成元年12月

Ⅱ．筑波大学生の価値観の類型化

思考・行動様式を決定，予測する要因のひとつに価値観があげられることは既に述べたが，本章では，先ずこの価値観についての分析を試みる。

価値観の全く同じ者などいないであろうが，それがお互いにある程度，あるいは部分的に似たような者同士もいるはずである。そこで，ここでは価値観の類似した者同士をグループ化する統計解析の手法にも簡単に触れると同時に，そうした手法を用いた場合，筑波大学生全体がどのような価値観をもったタイプに分けられることになるのか，また，それぞれのタイプの全学に占める割合がどれぐらいの規模であるかを推定する。

価値観に関しては，ここでは，「一般的価値」と，筑波大学生に比較的固有の価値観（「筑波型ヤッピー」と名付けた）の二側面に分け，それぞれ毎の分析を行う。

1．一般的価値観の因子の発見

一般的価値観に関する質問項目は，ダニエル・ヤンゲロビッチがアメリカで生起しつつ

ある価値観の変化をとらえたニュールールを参考に鮑戸ら[1]が日本人にあてはまるように翻案した18項目に関して筆者が検討を重ね，最終的に14項目を選んだ。それらは表－1に示される項目群で，学生には各質問項目に，「そのとおり」「だいたいそうである」「あまりそうでない」「そうではない」の4段階で評定してもらった。こうした項目群は，個々バラバラではなく，互いに関連のある項目があるはずで，そうした関連ある項目をまとめあげ，さらにその項目同士に共通する因子（factor）を探り出す手法が「因子分析法」と呼ばれる統計解析法である。

この手法を先の14項目に対して適用した結果，5個の因子が析出された。表－1の数字（因子負荷量）が高ければ高いほど，各項目がその因子と深い関連があることを意味する。

まず，第1因子と関わりが深い項目としては，「少し無理だと思われる目標をたててがんばる方である」，「今は苦しくても，将来のためになるのなら多くのことは犠牲にできる」，「自分は，意志の強いどらかというと攻撃的な性格の持ち主である」等である。これらは，自分の将来のためになるのなら多少は苦しくても，ある目標へ向かって突き進む，

表－1　一般価値類型に関する14項目の因子分析の結果

（バリマックス回転後の因子負荷量）

項　　目	因子1 禁欲志向	因子2 質実志向	因子3 消極志向	因子4 伝統志向	因子5 奔放志向	COM-MUNALITY
少し無理だと思われる目標をたててがんばる方である	0.62	0.09	−0.19	0.06	−0.05	0.44
今は苦しくても，将来のためになるのなら多くのことは犠牲にできる	0.46	0.32	−0.14	0.1	0.01	0.34
自分は，意志の強いどちらかといえば攻撃的な人間である	0.39	−0.24	−0.15	−0.01	0.25	0.30
派手にめだつことよりも，地道に努力する方が好き	0.15	0.63	0.14	0.05	−0.06	0.44
あまり収入は多くなくても，やりがいのある仕事につきたい	0.07	0.30	−0.04	0.05	−0.02	0.10
アルバイトなどでお金を貯めてパァーッと使いたい	0.11	−0.32	0.15	−0.06	−0.07	0.14
リーダーになって苦労するよりは，のんきに人に従っている方が好き	−0.21	0.01	0.51	−0.04	−0.01	0.31
休日などは一日ボーッとしていたい	−0.09	−0.01	0.49	0.08	0.09	0.26
自分のやりたいことがほとんどできなくて生活がつまらない	0.01	−0.21	0.26	−0.02	−0.07	0.12
古いものは，長い間ずっと受け継がれてきたものなので大切にする	0.17	0.1	0.05	0.61	−0.03	0.42
家族と離れて生活していても，いつも家族のことを気にかけている	0.17	0.16	0.03	0.35	−0.06	0.18
伝統的な宗教的習慣にあまりこだわらないで生活する方がよい	0.09	0.01	0.02	−0.30	0.04	0.10
他人のことは，あまり気にしないで自分の生活を大切にするほうである	0.15	0.08	0.05	−0.06	0.50	0.29
自分のことを考える前に他人のことを考える	0.27	0.09	0.01	0.12	−0.43	0.28

例えば，戦後の日本経済の復興に尽くした世代に共通してみられた，あの真面目さを思い起こさせる項目であることから，『禁欲志向』因子と呼ぶことにする。

次に，第２因子は，「派手にめだつことよりも，地道に努力する方が好き」，「今は苦しくても，将来のためになるのなら多くのことは犠牲にできる」，「あまり収入は多くなくてもやりがいのある仕事につきたい」といった項目を肯定する関係にある一方で，「アルバイトなどでお金を貯めてパァーッと使いたい」，「自分は，意志の強いどちらかというと攻撃的な性格の持ち主である」という項目を否定する関係にあり，これらは控えめで謙虚さを表す内容の項目と関わりが深い。そこでこれは，『質実志向』因子と名付けた。

第３因子は，「リーダーになって苦労するよりは，のんきに人に従っている方が気楽でよい」，「休日などは，一日ボーッとしていたい」，「自分のやりたいことがほとんどできなくて生活がつまらない」という項目と関連が深い。これらは，どちらかというと面倒なことはできるだけ避けようとする内容の項目や，自分の道を自ら切り開いていく積極的態度に欠ける内容の項目と関連が深いことから，『消極志向』因子と呼ぶことにする。

第４因子は，「古いものは，長い間ずっと受け継がれてきたものなので大切にする」，「家族と離れて生活していても，いつも家族のことを気にかけている」といった項目と関連が強く，また「伝統的な宗教習慣にあまりこだわらないで生活する方がよい」という項目で負の因子負荷量を示している。これらは他者志向を含んだ伝統的な考え方を表していると思われるので，『伝統志向』因子と呼ぶことにする。

最後に，第５因子は，「他者のことは，あまり気にしないで自分の生活を大切にする方である」とは正の関連が，そしてまた「自分のことを考える前に他人のことを考えるほうだ」と負の関連が強い。これらは他人をあまり気にせず，自分の人生をマイペースに楽しく送りたいという志向と関わっていることから，『奔放志向』因子と名付ける。このようにして，一般的価値観に関する五つの因子が抽出されたわけだが，これまでの価値観研究によって発見された従来の因子と比較して，特徴的なものは特にない。次に，価値観の類型化を行うにあたってのもう一つの柱になる「筑波型ヤッピー」スケールについて分析を試みることにする。

２．筑波型ヤッピーの因子の発見

一般的価値観の他に，筑波大学生に固有な価値を表す項目を14あげ，一般的価値観同様「そのとおり」から「そうではない」の４段階で学生に評定してもらった。これら14項目を選定するにあたっては，『筑波大学学生生活調査（昭和54年２月調査)』，『昭和59年度筑波大学学生生活実態調査』，『昭和63年度筑波大学学生生活実態調査』といった三つの調査報告を参考にした。また，14の質問項目は，アメリカのヤッピーのライフスタイルを分析するのに考案されたヤッピースケールの名に倣って「筑波型ヤッピースケール」と名付けられた。なお，筑波型ヤッピースケールは表－２に示す通りで，一般的価値観同様これにも因子分析法を用いて共通項をまとめあげていった。筑波型ヤッピーにおいては，４個の因子が抽出された。

まず，第１因子は，「スポーツで，疲れた神経をスカッとさせる」，「スポーツで，丈夫なからだづくりに励んでいる」，「スポーツは，見て楽しむよりも実際に自分で行うほうが好きである」，「運動やスポーツは，仲間づくりや新しい人との出会いを与えてくれる」といった項目と関連が深い。これらはスポーツに積極的に関わりながら何かを得ようとする志向を表していることから『スポーツ志向』因子と呼ぶことにする。

表－2　筑波大型ヤッピーに関する14項目の因子分析の結果

（バリマックス回転後の因子負荷量）

項　　目	因　子　1 スポーツ志向	因 子 2 装飾志向	因 子 3 学業志向	因 子 4 健康志向	COM- MUNALITY
スポーツで疲れた神経をスカッとさせる	0.72	0.09	0.04	−0.01	0.53
スポーツで丈夫な身体づくりにはげんでいる	0.69	0.07	0.03	−0.02	0.50
スポーツは見て楽しむよりも実際に自分で行う方が好きである	0.67	0.09	0.02	−0.06	0.47
運動やスポーツは，仲間づくりや新しい人との出会いを与えてくれる	0.55	0.10	−0.01	0.04	0.32
スポーツを楽しむよりもバイトでお金を稼ぐ方が好き	−0.55	0.11	0.00	−0.02	0.32
もし体育の授業がなかったら自分で進んで身体を動かすことはしない	−0.72	−0.02	0.06	0.06	0.52
流行やファッションには敏感でできるだけ情報を得るようにしている	0.07	0.79	0.00	−0.02	0.63
ブランドものを持ったり身につけたりしたい	0.03	0.53	−0.01	−0.02	0.31
自分の部屋にはセンスのよいインテリアなどを置いている	0.05	0.50	0.08	−0.01	0.29
大学生の本分は，勉学に励むことにあるので少々の誘惑には負けず授業には出席する	0.02	−0.02	0.61	0.19	0.41
何がなんでも成績はＡがとりたい	−0.01	0.13	0.57	0.10	0.37
学業の成就に今最も関心がある	0.00	−0.03	0.56	0.07	0.34
タバコは，体に悪いので吸わない方がよい	0.03	−0.03	0.13	0.69	0.50
酒の飲み過ぎは，体に悪いので飲まない方がよい	−0.07	−0.02	0.21	0.55	0.35

第２因子は，「流行やファッションには敏感でできるだけ情報を得るようにしている」，「できたらブランドものを持ったり身につけたりしたい」，「自分の部屋にはセンスのよいインテリアなどを置いている」という項目が関連しており，これらは自分の生活に彩りを与え，演出効果の高い事物を積極的に取り入れようとする価値観と深く関わっている内容の項目と思われるので，これを『装飾志向』因子と呼ぶことにする。

第３因子は，「大学生の本分は勉学にはげむことにあるので，少々の誘惑には負けずに授業には出席する」，「何がなんでも成績はＡがとりたい」など，学業の達成に関わる項目との関連が深いことから，『学業志向』因子と呼ぶことにする。

第４因子は，「タバコは体に悪いので吸わない方がよい」，「酒の飲み過ぎは，体に悪いので飲まない方がよい」といった項目との関わりが深い。これらは身体や健康にとって良くないことを避けようという志向であることから，『健康志向』因子と名付けることにする。

このように，筑波型ヤッピーの価値観に関する四つの因子が抽出されたわけだが，次に，これと先の一般的価値観に関する五つの因子とを合わせた９個の因子から，筑波大学生の価値類型を構成してみる。

３．価値類型の７タイプ

これまでの過程から，一般的価値類型に関

する5因子と筑波型ヤッピーの4因子を合わせ,全部で9個の因子が抽出されたわけだが,学生一人ひとりが,これら各因子の傾向をどの程度持っているかを「因子得点」として得点化することができる。例えば,Aという学生は「スポーツ志向」因子の得点が高く,「健康志向」でも因子得点が高いが,「学業志向」因子では得点が低く・・・・というようにして,各個人について,九つの因子得点を算出することができるのである。

この九つの因子得点の傾向は個人ごとにまったくバラバラなものでなく,似通った学生同士の集まりがあると思われる。因子得点の似通ったパターンをもつ者をいくつかのグループ(類型)にまとめていく統計手法が「クラスター分析」である。この手法を適用した結果,価値観には7類型あることが明らかになった。表－3には各類型ごとに,九つの因子得点の平均値を示した。ここでは,それぞれの類型の因子の傾向をみていくことにする。

第1類型は,「スポーツ志向」が非常に強く,「質実志向」も強いのが特徴である。このタイプは格好や身なりにこだわらず,スポーツにひたむきな情熱を注いで練習に明け暮れる,一昔前の体育系の泥臭い運動部員を想起させるので,このタイプを【スポーツ硬派型】と名付けた。

第2類型は,「学業志向」と「スポーツ志向」が共に強く,さらに「禁欲志向」もまた強い。そして,「消極志向」と「奔放志向」が弱いという特徴をもったタイプである。このタイプは,学業とスポーツをバランスさせ,しかも,それらに前向きな姿勢で取り組んでおり,理想的な学生像と思える。また,「装飾志向」が平均的であることからも,純朴で飾り気のない優等生を思い起こさせる。これのタイプを【学業スポーツ両立型】と命名することにしたい。

第3類型は,「学業志向」は強くはないが,「装飾志向」や「スポーツ志向」の強いことが特徴である。これらは,大学生の本分である学業よりも,ファッションや流行,スポーツなどを享受する志向が強い学生像だと思われるので,これを【大学生活享楽型】と名付けることにする。

第4類型は,「健康志向」はじめ,ほとんどの志向が弱い傾向にあるなかで,唯一「奔放志向」が強いのが特徴である。つまり,健康や学業を犠牲にしてでも,マイペース,自己中心に奔放に生活することへの志向が強い。従って,このタイプを【自己本位型】と名付けることにした。

第5類型は,「健康志向」が非常に弱く,他は平均的傾向にあるのが特徴であることから,これを【健康無関心型】と呼ぶことにする。

第6類型は,特に「スポーツ志向」が弱く,

表－3　7類型別9因子の因子得点

因子 / 類型	一般的価値類型					筑波型ヤッピー			
	禁欲志向	質実志向	消極志向	伝統志向	奔放志向	スポーツ志向	装飾志向	学業志向	健康志向
1.スポーツ硬派型	−0.108	0.447	0.079	0.182	−0.089	0.775	−0.263	0.046	0.060
2.学業スポーツ両立型	0.691	0.348	−0.258	0.293	−0.195	0.423	−0.118	0.772	0.383
3.大学生活享楽型	0.112	−0.381	−0.367	−0.366	−0.091	0.414	0.477	−0.561	0.094
4.自己本位型	−0.143	−0.836	−0.297	−0.437	0.453	−0.201	−0.406	−0.863	−1.612
5.健康無関心型	0.093	−0.220	0.151	−0.007	−0.247	−0.245	0.476	0.112	−1.428
6.スポーツ回避型	0.379	0.146	−0.025	0.108	0.340	−0.714	0.641	0.584	0.325
7.元気喪失型	−0.620	−0.174	0.379	−0.052	0.097	−0.721	−0.417	−0.307	0.141

逆に「装飾志向」や「学業志向」が強いのが特徴であって，これは洋服や化粧などの流行・ファッションに気を配り，スポーツのように汗をかく運動をできれば避けたいと思っているタイプである。けれども，「学業志向」が高いことから，勉学には懸命に努力している。これを【スポーツ回避型】と名付ける。

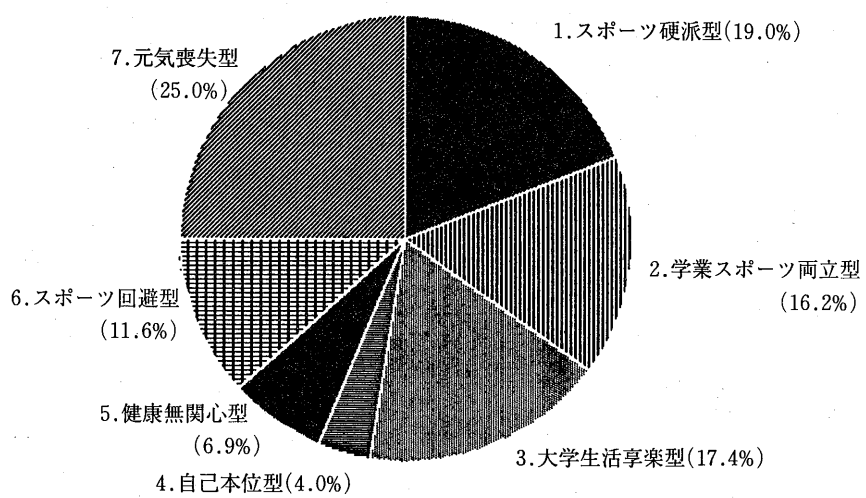
第7類型は，「消極志向」が強く，「スポーツ志向」や「禁欲志向」が弱いわりに，「健康志向」が強いという特徴をもつ。これが示すように，健康には関心あるものの，だからといって，その維持増進のためにスポーツや運動をコツコツやっているわけでもなければ，またやっていこうとする意志，気力があるわけでもない。消極的で非活動的ではあるが，健康でありたいと願っているいわば自分に都合のいい考えをもったタイプといえる。このタイプには【元気喪失型】という名称を与えることにする。

こうして，筑波大学生は七つの類型に分類された。次に，各類型が筑波大学生全体の中にどの程度の割合で存在するかをみながら，筑波大学生の価値類型にみる特徴を大まかに押さえておくことにする。

全学生数に占める各類型の構成比を示した図－1を見ると，筑波大学生に最も多く見られるのが第7類型の【元気喪失型】(25.0%)ということになる。

つまり，4人に一人はこの類型に属すると推定できることになり，このタイプの特徴をスポーツに限って言えば，「スポーツ志向」因子が非常に弱い（－0.721）ことを改めて確認しておきたい。

次いで第1類型【スポーツ硬派型】(19.0%)，第3類型【大学生活享楽型】(17.4%)，第2類型【学業スポーツ両立型】(16.2%)が挙げられ，これらはどのタイプとも，スポーツへの志向は強く，特に【スポーツ硬派型】でその傾向が顕著であった。これら三つのタイプの割合の合計は52.6%に達し，筑波大学生の約半数がスポーツへの志向が強いと推定できる。ただ，スポーツ志向が強いと言っても，それぞれの価値観全体との関連でスポーツの位置付けを理解しておく必要がある。例えば，スポーツが学生生活の中核になっているとも言える【スポーツ硬派型】と，スポーツ同様学業にも意欲的に取り組む志向をもつ【学業スポーツ両立型】では，当然，スポーツへの取り組み方，関わり方の質や程度はかなり違っているものと予想される



図－1　筑波大学全体に占める各価値類型の構成比

からである。それらの次にくるタイプは，割合の高い順に，第６類型の【スポーツ回避型】（11.6％），第５類型の【健康無関心型】（6.9％），第４類型の【自己本位型】（4.0％）というようになっている。

次章では，本章で導かれた価値類型の７タイプ毎に，アンケートの他の質問項目とのクロス分析から，より鮮明に各タイプの特徴を描き出していくことにする。

Ⅲ．各価値類型の人口統計学的属性

本章では，前章で導き出された価値類型の７タイプの特徴を，性別，学年，学類（群）といった三つの視点からみていくことにする。

１．性　別

各タイプの性別の割合を図－２に示した。まず，筑波大学生全体は男子が66.7％，女子が33.3％という比率になっていることを確認しておきたい。【スポーツ硬派型】，【学業スポーツ両立型】，【大学生活享楽型】，【元気喪失型】の男女比は全体のそれに近似しているといえる。

他の３タイプについてみると，まず【自己本位型】では男子の占める比率が91.3％と，かなり高いのが特徴である。似たような傾向は【健康無関心型】にもみられ，このタイプの80.9％が男子によって占められていることがわかる。この２タイプは男子に特徴的な価値類型であるということができる。

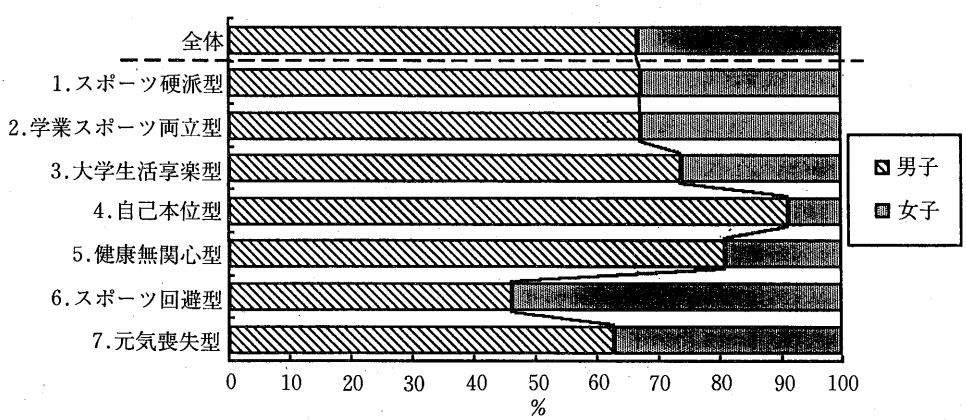
これに対して，【スポーツ回避型】では，女子の割合が53.8％と男子を上回っているのが特徴である。このタイプは【自己本位型】や【健康無関心型】とは逆に，女子に特徴的なタイプとみなすことができる。

２．学　年

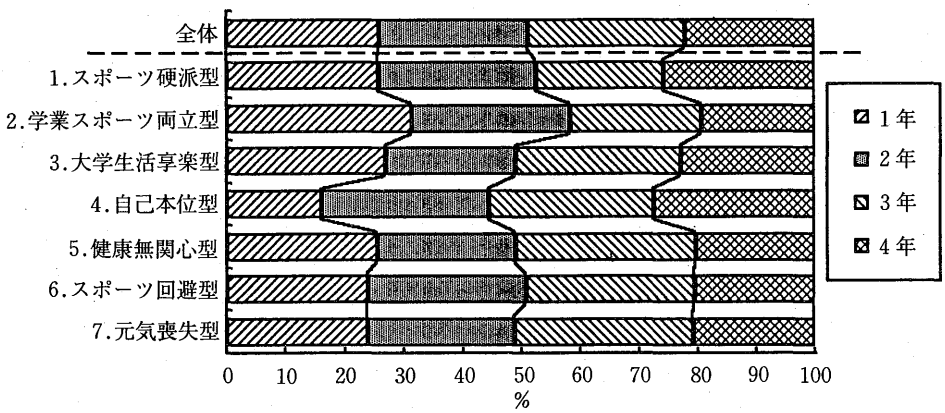
次に，各タイプの学年別の特徴を示したのが図－３である。

全学的に各学年の割合はほぼ1/4ずつになっていることが確認できる。タイプ別にみてみると，まず特徴的なのが【学業スポーツ両立型】であり，このタイプは学年が進むに従ってその割合が小さくなる傾向（１年：31.2％，２年：27.0％，３年：22.3％，４年：19.4％）が認められる。また，【自己本位型】に着目してみると，１年生の比率が16.3％とかなり低いのに対して，２，３，４年生の割合が高くなっているのが特徴である。

これらの他の５タイプに関してはそれほど特徴はみられず，つまり，全体の学年比にほぼ近い構成になっている。



図－２　性別からみた各価値類型の特徴



図－3　学年からみた各価値類型の特徴

3．学類（群）

筑波大学の教育単位は表－4にもあるように人文学類から芸術専門学群まで，12学類2学群，合計14の単位からなる（但し，体育専門学群を除く）。価値類型の7タイプが各学類（群）にどの位の割合でいるかを表したのが表－4である。

表中の数字は，各学類（群）における各タイプの割合を示している。そして，各学類における各タイプの割合を示す値が，全学に占める各タイプの割合よりも高くなっているものには＊を記してある。表の最上段に位置する「人文学類」を例に取り上げて説明すると，人文学類の調査対象者288人のうち27.78％が【元気喪失型】であり，その割合は全学に占める【元気喪失型】の割合25.0％よりも高いということである。

そこで＊印のついた学類（群）をタイプ別に，数値の大きい順に並べてみると次のようになる（参考までに，その学類がどういうタイプの学生の割合が多いかを知れるように，そのタイプが当該学類において最も高い割合にある場合，その学類（群）名を太字にて強調してある）。すなわち，

【スポーツ硬派型】は「自然」「人間」「農林」「医学」「比文」，

【学業スポーツ両立型】は「**農林**」「**国関**」「情報」「生物」「医学」「社工」「自然」，

【大学生活享楽型】は「**社工**」「**医学**」「**基礎工**」「社会」「国関」「情報」，

【自己本位型】は「基礎工」「社工」「情報」「医学」「自然」「国関」，

【健康無関心型】は「基礎工」「芸術」「社工」「社会」「農林」，

【スポーツ回避型】は「日日」「人文」「芸術」「比文」「生物」「人間」，

【元気喪失型】は「**芸術**」「**人間**」「**生物**」「**比文**」「**社会**」「**人文**」「**日日**」「**情報**」となる。

Ⅳ．各価値類型の行動・思考・反応の様式

本章では，各価値類型における体育やスポーツに対する思考・行動及び反応の様式にみられる傾向的な特徴を分析していくことにする。

1．スポーツ関連のクラブ，サークルへの所属率

各タイプ毎の行動様式の傾向を知るためスポーツ関係のクラブやサークルへの所属率を図－4に示した。

これと表－3をあわせてみてみると，【スポーツ硬派型】（所属率：70.3％），【大学生活享楽型】（61.6％），【学業スポーツ両立型】

表－4　各学類毎の価値類型について

学類（群）＼価値類型	スポーツ硬派型	学業スポーツ両立型	大学生活享楽型	自己本位型	健康無関心型	スポーツ回避型	元気喪失型
人社比人日							
人文(N=288)	16.7%	14.9%	11.5%	3.1%	6.9%	*19.1%	*27.8%
社会(N=314)	16.6%	12.7%	*20.4%	3.5%	*8.6%	10.2%	*28.0%
比文(N=210)	*20.5%	11.4%	15.7%	2.9%	5.7%	*15.7%	*28.1%
人間(N=288)	*23.3%	8.0%	17.0%	3.1%	3.1%	*14.9%	*30.6%
日日(N=199)	15.1%	15.6%	16.1%	0.0%	5.5%	*20.1%	*27.6%
クラス(N=1299)	18.5%	12.4%	16.2%	2.7%	6.1%	15.6%	28.5%
自生農							
自然(N=602)	*24.1%	*16.9%	15.8%	*4.3%	6.0%	8.0%	24.9%
生物(N=258)	18.6%	*18.2%	12.0%	2.7%	4.3%	*15.1%	*29.1%
農林(N=408)	*23.0%	*23.5%	12.7%	3.2%	*7.1%	10.0%	20.3%
クラス(N=1268)	22.6%	19.3%	14.0%	3.6%	6.0%	10.1%	24.3%
三学							
社工(N=269)	15.6%	*17.1%	*26.8%	*5.6%	*8.9%	6.7%	19.3%
情報(N=253)	17.0%	*19.0%	*19.4%	5.5%	5.5%	6.7%	*26.9%
基礎工(N=418)	16.3%	14.4%	*22.2%	*6.5%	*10.8%	6.9%	23.0%
国際関係(N=142)	19.0%	*21.8%	*19.7%	*4.2%	6.3%	*13.4%	15.5%
クラス(N=1082)	16.6%	17.1%	22.4%	5.7%	8.5%	7.7%	22.0%
医芸							
医学(N=189)	*21.0%	*17.6%	*22.7%	*5.1%	5.7%	10.8%	17.0%
芸術(N=176)	9.5%	14.8%	13.8%	3.7%	*10.6%	*16.9%	*30.7%
クラス(N=365)	15.1%	16.2%	18.1%	4.4%	8.2%	14.0%	24.1%
全学(N=4014)	19.0%	16.2%	17.4%	4.0%	6.9%	11.6%	25.0%

（50.9%）といったスポーツ志向の強いタイプにおいては，クラブ，サークルへの所属率が5割を越えている。反対に，スポーツ志向の特に低い【スポーツ回避型】(22.3%)と【元気喪失型】（23.4%）では2割程度の所属率になっている。また，中程度のスポーツ志向をもつ【自己本位型】（40.4%）や【健康無関心型】（37.3%）における所属率は約4割となっていることがわかる。

この結果から，概して，スポーツ志向が強いタイプほど，スポーツ関連のクラブ，サークルへの所属率が高いと言うことができる。

2．スポーツ感

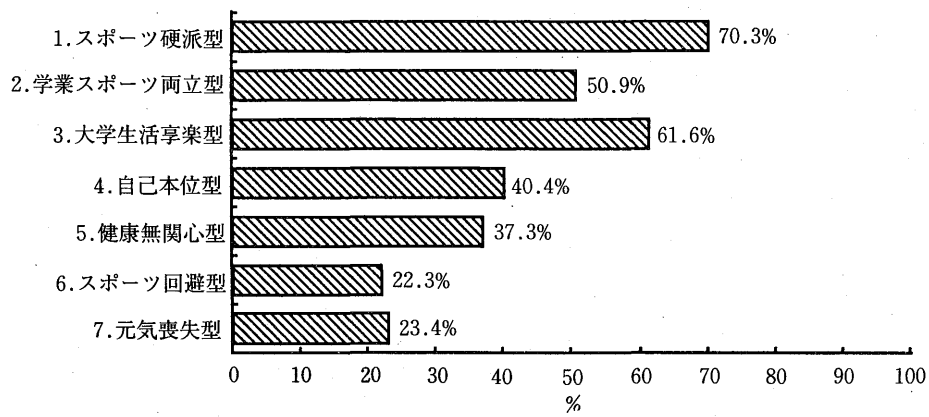
各タイプ毎のスポーツに対する思考様式の傾向を知るため，スポーツ・身体活動で過ごす時間はどのような時間であるかを尋ねた18の質問項目に対して，「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4段階で評定してもらい，それを因子分析した結果を表－5に示した。スポーツで過ごす時間の内容を問うこれらの項目は，言い方を換えれば，個人のスポーツ感（思考様式）を表すものとも解釈できる。

因子分析の結果，スポーツ観を表す5因子が抽出され，寄与率の高い順にそれぞれ『修練志向』因子，『効用志向』因子，『快楽志向』因子，『教養志向』因子，『解放志向』因子と命名した。各タイプに属する学生が，これらの5因子の傾向をどの程度もっているかを表す因子得点を各タイプ毎に平均化して，平均因子得点として示したのが図－5である。

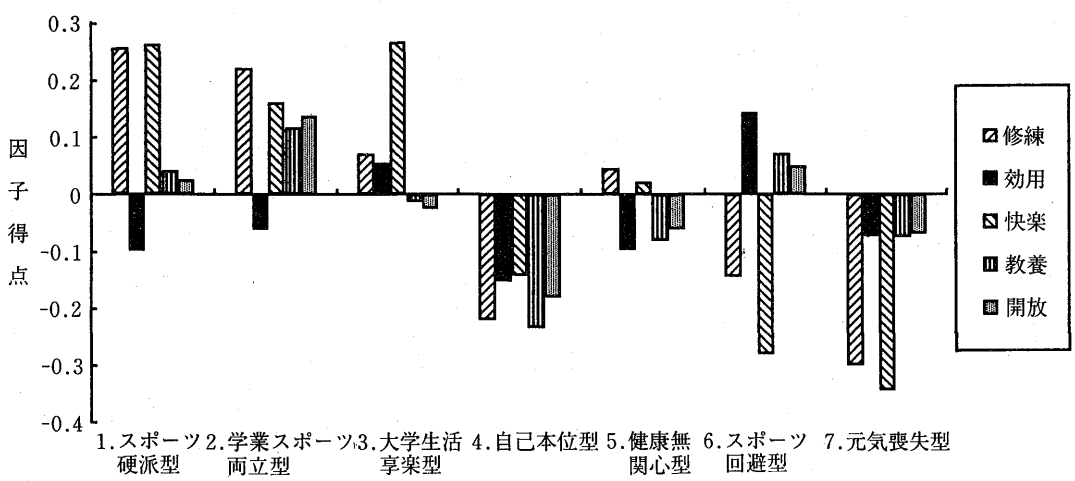
これをみると，「スポーツ志向」および「装飾志向」の強い【大学生活享楽型】において

は，「快楽志向」因子が強い傾向がみられる。また，「スポーツ志向」と共に「質実志向」の強かった【スポーツ硬派型】では，「快楽志向」と「修練志向」の両因子が同じくらいの強さを示している。「スポーツ志向」の強いもう一つタイプである【学業スポーツ両立型】は他のどのタイプとも異なった特徴，すなわち，「修練志向」「快楽志向」「教養志向」「解放志向」の4因子が強い傾向を示した。このタイプはスポーツの価値を単に「修練」や「快楽」のイメージで捉えているだけでなく，「教養」や「解放」といったイメージも加え，スポーツの価値をいわば多面的に認めていることが伺える。

次に，「スポーツ志向」の弱い【スポーツ回避型】では，「スポーツ志向」の強い上の3タイプとは反対に，「修練志向」および「快楽志向」因子が負の値になっている。しかし，「効用因子」は他の因子に比べ，相対的に強いことが読み取れる。表－5で分かるように，この因子に関連の深い項目には「ファッションを楽しむ時間」，「疲労をとり，身体を休める時間」というのがあること，そしてまた表－1，2では，このタイプが流行やファッションに価値をおく「装飾志向」そして「健康志向」が強い傾向になること，これら2点を総



図－4　各価値類型のスポーツ関連のクラブ，サークル所属率



図－5　価値類型別のスポーツ観5因子の平均得点

表－5　スポーツ観に関する因子分析の結果

（バリマックス回転後の因子負荷量）

項　　目	因子1 修練志向	因子2 効用志向	因子3 快楽志向	因子4 教養志向	因子5 解放志向	COM-MUNALITY
ルールに従い規則正しくする時間	0.62	0.18	0.04	0.14	0.06	0.44
勝利の喜びや達成感を味わう時間	0.60	0.12	0.31	−0.02	0.01	0.47
修行研修をつむ時間	0.56	0.25	−0.03	0.14	0.09	0.41
好奇心を満たす時間	0.43	0.09	0.32	0.16	0.30	0.41
自己を表現したり個性的になれる時間	0.40	0.25	0.33	0.18	0.14	0.38
健康や体力の増進のための時間	0.32	−0.18	0.23	0.08	0.27	0.26
実益と収入を多くする時間	0.13	0.73	0.04	0.09	−0.02	0.56
ファッションを楽しむ時間	0.18	0.51	0.06	0.18	0.04	0.33
仕事に役立つ技術や能力を磨く時間	0.30	0.50	0.06	0.30	0.18	0.46
疲労をとり，身体を休める時間	−0.01	0.44	0.20	0.21	0.39	0.43
社会や人のために役立てる時間	0.33	0.43	0.06	0.33	0.19	0.44
楽しく時のたつのを忘れることもある時間	0.16	0.05	0.80	0.05	0.11	0.69
くつろいだ気分になる時間	−0.02	0.17	0.67	0.18	0.23	0.56
家族・友人・知人などと人間関係を深めたり，広めたりする時間	0.28	0.01	0.42	0.14	0.16	0.30
知識や教養を高める時間	0.23	0.22	0.23	0.72	0.08	0.68
芸術や美的関心を高める時間	0.09	0.31	0.12	0.64	0.14	0.55
日常生活から解放される時間	0.28	−0.05	0.32	0.05	0.57	0.51
自然にふれる時間	0.05	0.31	0.13	0.12	0.53	0.41

合して考えると，このタイプは，ファッションを楽しむため，あるいは健康の手段としてのイメージをスポーツに強くもっているとみることができそうである。

同じく，「スポーツ志向」の弱いもう一つタイプである【元気喪失型】は，【自己本位型】同様，全ての因子の平均得点が負の値を示し，その中でも特に「修練志向」および「快楽志向」が弱い傾向にあることが伺える。

「スポーツ志向」が中位にあるタイプのひとつである【自己本位型】でも，スポーツ観を表す5因子の平均因子得点が全て負の値を示しており，それも【元気喪失型】よりも全体的にかなり低いのが特徴で，スポーツにはそれほど良いイメージを抱いていないようである。もうひとつの【健康無関心型】には，特に目立った特徴は見い出せないが，相対的に「効用志向」が弱い。

総じて，スポーツ志向の強いタイプほど「快楽志向」が強いことが明らかになった。また，「学業志向」の強い【学業スポーツ両立型】においてのみ，スポーツを知的，芸術的対象として認識している度合いを表す「教養志向」が強い傾向にあることが分かった。従って，知的，芸術的教育の教材としてスポーツを取り上げる場合，それを比較的受け入れ易いのはこのタイプの学生であろうと推測される。

3．体育の授業観

正課体育の履修制度の受け止め方に関して18項目をアンケート調査票のなかに用意したが，ここでは，近年，大学一般体育に対して出されている批判点に関連する次の2項目を特に取り上げ，タイプ別に履修制度の受け止

め方（反応様式）の特徴をみていくことにする。その2項目とは，

（1）「正課体育の授業は必要である」

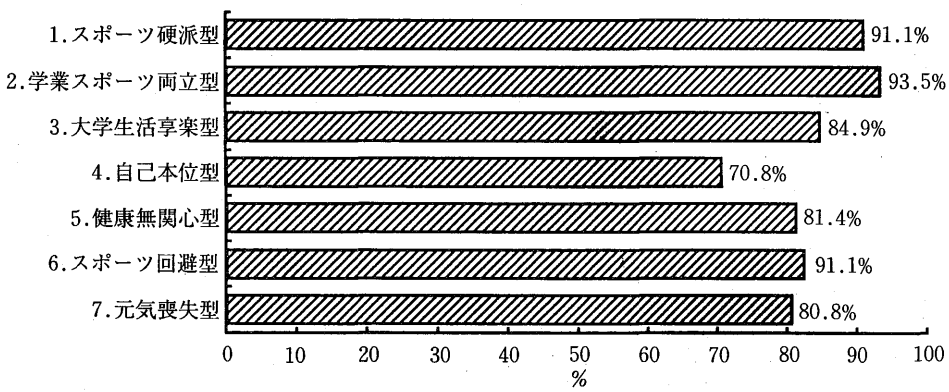
（2）「体育の授業は4年間にわたって行うのがよい」

であり，以上二つの質問に対して，「そう思う」,「まあそう思う」,「あまりそう思わない」,「そう思わない」の4段階で評定してもらった。そして，「そう思う」と「まあそう思う」と回答した者の割合を合計した値を「肯定回答率」とし，その値を項目ごとに図－6と図－7に示した。

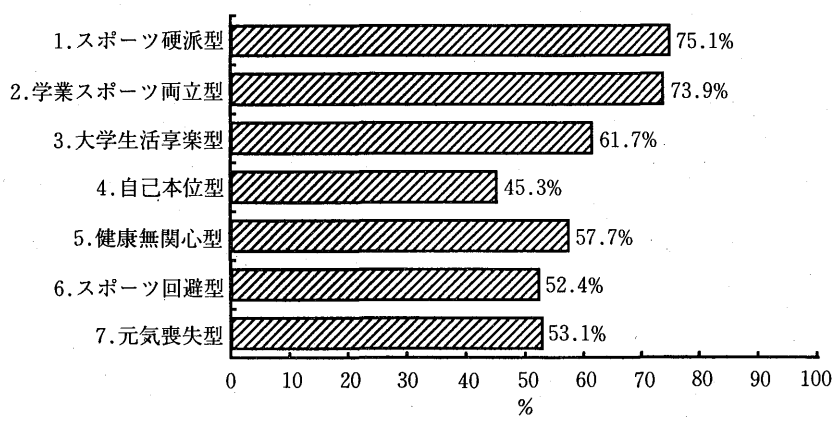
（1）正課体育の授業の必要性

図－6は，「正課体育の授業は必要である」という意見を肯定する者の割合を各タイプ別に示したもので，これをみると，スポーツ志向の強さと体育の授業の必要性の間には相関が認められそうな結果となっていることが分かる。つまり,【学業スポーツ両立型】,【スポーツ硬派型】,【大学生活享楽型】といったスポーツ志向の強い3タイプで，それぞれ93.5%，91.1%，84.9%の者が体育の授業を必要と答えており，スポーツ志向の低いないし中程度のタイプよりも肯定する割合が高くなっている。

また，どのタイプにおいても，8割程度ないしそれ以上の者が，正課体育の授業は必要であると回答していることからみて，体育の授業は学生に大方支持されているとみてよいだろう。



図－6　価値類型別にみた正課体育の必要性



図－7　価値類型別にみた正課体育4年間必修制に対する賛否

（2）正課体育4年間必修制への賛否

筑波大学生は，体育を必修科目として4単位取得しなければ卒業できない。そして，正課体育の授業が大方の学生にその必要性が認められていることがわかったが，それではたして，4年間にわたって体育を受けなくてはならない現状をどのように受け止めているのであろうか。図－7は，「体育の授業は4年間にわたって行うのがよい」という考えに対する肯定回答率を，各タイプ別に表したもので，スポーツ志向の強い【スポーツ硬派型】，【学業スポーツ両立型】，【大学生活享楽型】といった3タイプにおいて肯定回答率が他のタイプよりも高くなっているのが特徴である。

なお，注目すべき点は，この意見に対する肯定回答率がどのタイプにおいても，正課体育の授業の必要性を示した値（図－6）よりも低くなっているということである。このことは，体育の授業を行うこと自体には賛成であるが，それが4年間義務づけられる履修制度に不満をもつ者が少なからず存在することを意味していると思われる。ちなみに，正課体育の授業の必要性に対する肯定回答率から授業を4年間にわたって行うことに対する肯定回答率を引いた値(「4年間必修制反対度」)を算出してみると，【スポーツ硬派型】：16.0ポイント，【学業スポーツ両立型】：19.6ポイント，【大学生活享楽型】：23.2ポイント，【自己本位型】：25.5ポイント，【健康無関心型】：23.7ポイント，【スポーツ回避型】：38.7ポイント，【元気喪失型】：27.7ポイントとなり，スポーツ志向の低いタイプほどそのポイントが高いという傾向が認められる。逆に言えば，スポーツ志向が高くなるほど，4年間の必修制を反対する者は比較的少ないということである。

4．正課体育の授業への要望

（1）正課体育が必修制から選択制へ移行した場合の受講希望

正課体育が必修制でなくなり，自由選択制になったと仮定した場合に，どの程度の受講者を予想できるかを知るために，「正課体育が選択科目になっても履修すると思うか」という質問を用意した。それに対する肯定回答率を各タイプ別に示したのが図－8である。

これをみると，選択制を支持する者の割合の高低は，やはりスポーツ志向の強弱に関連があるらしいことが伺える。つまり，スポーツ志向が強いほど，体育が選択制になっても授業を受講したいと希望する者が多くなるということである。

また，これ（「自由選択制支持率」）を4年間の正課体育必修制度の賛否を示した図－7の肯定回答率（「必修制支持率」）とを比較して，自由選択制支持率から必修制支持率を引いた値を算出してみると，どのタイプにおいてもその値はプラスになることがわかる。このことはつまり，体育が必修科目から外され選択科目になったとしても受講希望者が多くいるということを意味している。選択制になった場合の希望単位数について詳しく尋ねた質問項目がないのでよくわからないが，ただ，少なくともその場合，従来の「4単位よりは少ない」あるいは「4年間ではなくもっと短い時間」という条件が潜在していると思われる。

（2）能力別コース（初級，中級，上級）の設置希望

図－9は，スポーツ技能のレベルに応じて初級，中級，上級といったコースに分けることへの希望を尋ねた結果を示しているが，これをみると，【スポーツ回避型】，【元気喪失型】，【健康無関心型】など，どちらかというと「スポーツ志向」の比較的低いタイプにおいて，その希望が高い傾向にあることが伺える。

これはおそらく，スポーツに懸命に取り組む志向が強い【スポーツ硬派型】の希望がそ

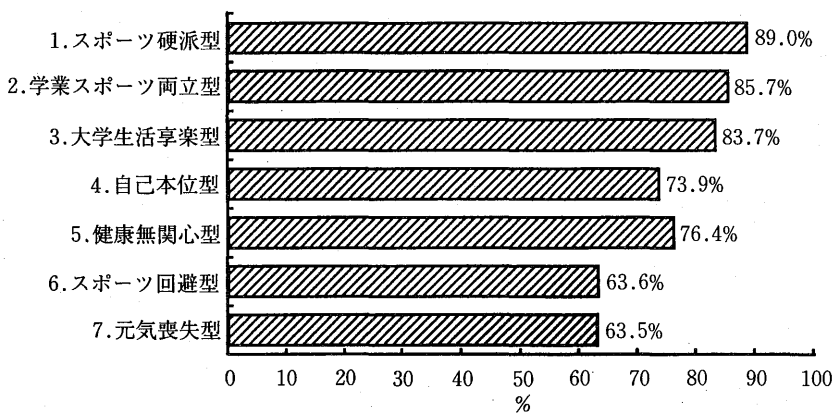
れほど高くないことも併せて判断すると，現在の授業が自分にとっては中級ないし上級ぐらいのレベルになると感じているため，もし能力別コース制が実現すれば，初級コースを受講して今よりも楽ができるという期待が表れているのではないかと解釈するしかないようである。【スポーツ硬派型】をはじめとするスポーツ志向の強いタイプは，現在の授業がかなり高いレベルにあると感じているのに加えて，ある程度現状に満足もしているので，能力別コース制導入にはそれほど関心を示していないと考えられる。

（3）各種「スポーツコース」（註）への参加希望

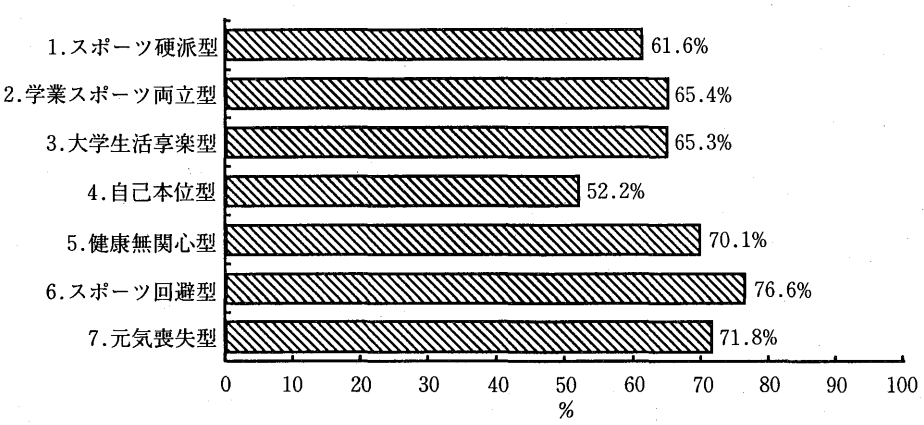
アンケート調査では，年間を通じて複数の運動種目を組み合わせた形式の「正課体育のコース制度（以後，「コース制」）」が開設された場合，どのコースを選択するかを尋ねている。ここでは，各価値類型の特徴を，彼らの希望するコースからの考察を試みる。

本設問において，コースを11コースあげ，各コースについて「積極的に参加したい」，「参加したい」，「あまり参加したくない」，「全く参加したくない」という4段階で評定してもらい，このうち「積極的に参加したい」と「参加したい」と答えた者の割合を合計し，その値をコースの「希望率」とした。

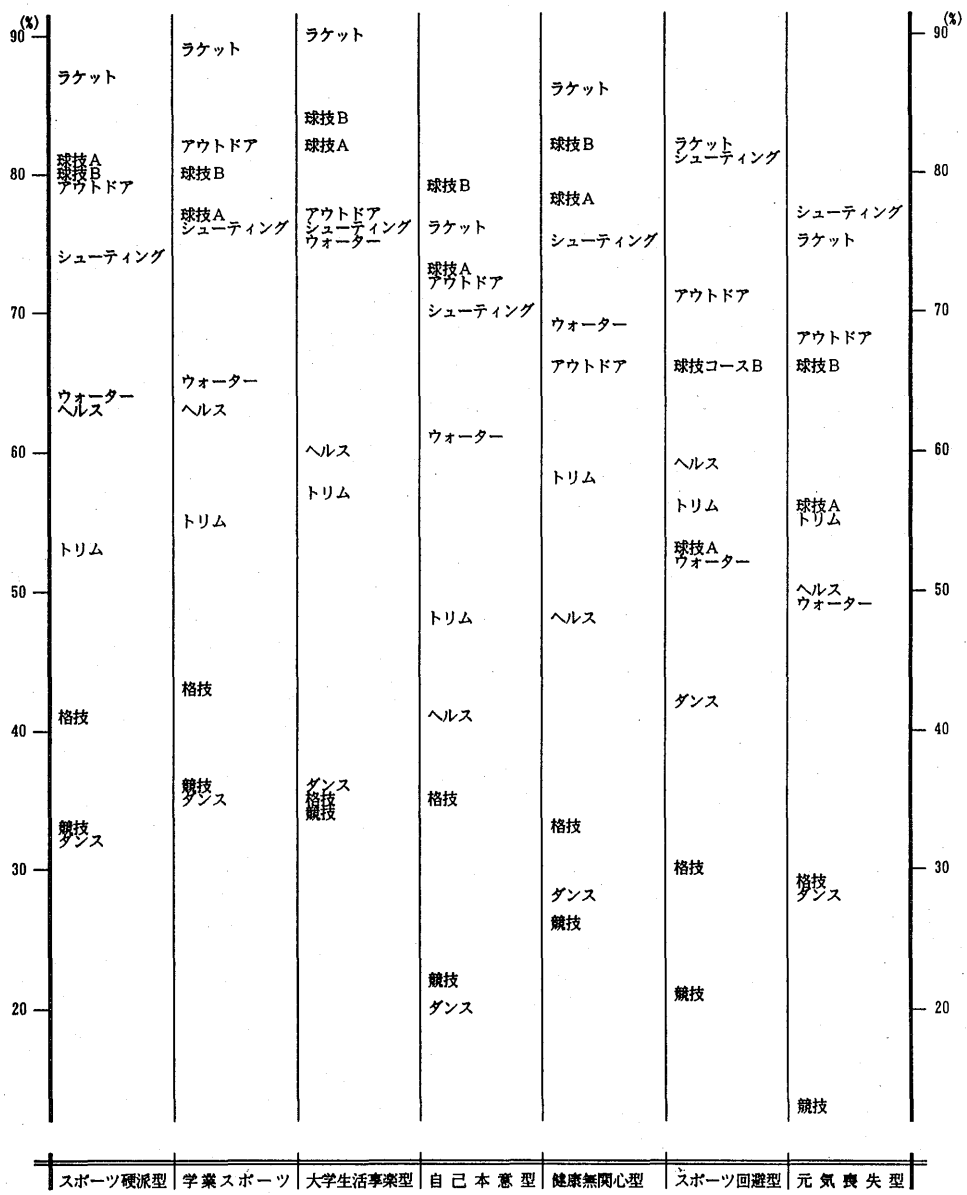
各コースの希望率を価値類型のタイプ別に



図－8　価値類型別にみた正課体育の選択制への移行に対する反応



図－9　価値類型別にみた能力別コースの設置希望



ヘルス：	ヘルスフィットネス・コース	ウォーター：	ウォーターフロントスポーツ・コース
競技：	競技スポーツ・コース	アウトドア：	アウトドアスポーツ・コース
球技A：	球技コースA	格技：	格技スポーツ・コース
球技B：	球技コースB	トリム：	トリムスポーツ・コース
ラケット：	ラケットスポーツ・コース	ダンス：	ダンス・コース
シューティング：	シューティングスポーツ・コース		

図－10　各価値類型におけるコースの希望率

希望率の高い順に上から配列したのが図－10である。

ラケットスポーツ，球技スポーツA，球技スポーツB，シューティングスポーツ，アウトドアスポーツは，どの価値類型においても高い希望率を示しており，特に，ラケットスポーツは，7タイプ中5タイプ（スポーツ硬派型，学業スポーツ両立型，大学生活享楽型，健康無関心型，スポーツ回避型）で最上位に位置している。一方，ダンスや競技スポーツ，格技スポーツは全てのタイプで低い希望率を示している。

スポーツへの志向が高い【大学生活享楽型】，【スポーツ硬派型】，【学業スポーツ両立型】は，全てのコースに対する希望率が他のタイプに比べて高いのが特徴で，この3タイプは，球技スポーツA，球技スポーツBが互いに接近した高い位置にあるのも共通した特徴である。さらに【スポーツ硬派型】と【学業スポーツ両立型】においては，他のタイプでは低い希望率にある格技スポーツに対する希望率が40％を超え，比較的高い値を示していることがわかる。

これに対して，スポーツ志向の低い【スポーツ回避型】と【元気喪失型】では，球技スポーツA，球技スポーツBの希望率の間に格差がみられること，そして，他の価値類型で希望率の高い球技スポーツBの値がこの両タイプでは低いのが注目される。この両タイプにおいては女子の占める比率が比較的高いことが，激しい身体接触を伴うボールゲーム種目（サッカー，ラグビー，ハンドボール，アメリカンフットボール）から成る球技スポーツBへの希望率を低くしている理由かも知れない。

【スポーツ回避型】では，ダンスコースが40％に達しており，これは他のタイプにはみられないほどの高い希望率である。これもこのタイプには女子の多い事が関係しているためと思われる。また，【元気喪失型】ではシューティングスポーツが最上位に位置するという，他の価値類型にはみられない特徴が認められた。

スポーツへの志向が中間に位置するタイプの一つである【自己本位型】では，球技スポーツBが最上位に位置しており，【健康無関心型】は，健康志向が低いにもかかわらず，ヘルスフィットネススポーツへの希望率が50％近い値を示している点が注目される。

V．結　語

1．まとめ

本研究では，正課体育を受講する筑波大学生の価値観分析を通じ，価値観の類似性，差異性によって筑波大学生が大きく7タイプに分類された。タイプによって，性別，学年，学類（群）といった人口統計学的属性に特徴がみられるものもあれば，そうでないタイプもあることが分かった。そもそもこうした価値観の類型化の試みは，価値観の違いや類似によって，体育の授業やスポーツの見方，考え方，関与の仕方など，思考・行動・反応の様式が異なってくる，あるいは似てくるのではないかという仮定から出発したものであった。研究の結果からタイプ間でもちろんそれらの様式が部分的に類似したようなタイプもみられたが，しかし概して，各タイプとも全体的なプロフィールやパターン傾向を見る限り，やはり他のタイプとは置き換えできない独特のタイプであることが多面的分析から明らかになった。

2．研究上の今後の課題

本研究では，価値観の違いがどのようなメカニズムによって体育の授業やスポーツに関する思考・行動・反応様式を決定づけることになるか，その因果論的分析までには立ち入ることは出来なかった。ただ，その糸口を示すにとどまったに過ぎないが，今後はその部

分を補い得る研究に発展させることが課題になってくる。

また，今回は価値観という視点からの類型化を試みたわけであるが，体育の授業やスポーツを巡る人々の意識や行動を説明するのにより有効なカテゴリーを発見する努力も必要になってくるであろう。

3．実践的示唆

もし，体育の授業がタイプの類似した者同士のクラス編成で行われる場合には，指導上のポイントや授業展開の道筋など，授業運営の戦略・戦術が策定しやすいという利点があると思われる。しかし，今回の調査結果からもわかるように，各タイプが全学類にまたがって存在している以上，現在の学類（群）単位の固定時間割制ではタイプ別クラス編成の実現は難しいと言わざる得ない。これは見方を換えれば，現在の体育の授業のクラスには7タイプの学生が，その割合は様々であるにせよ，混在しているということを意味している。

タイプが異なっても普遍的に通じる教授方法もあれば，逆に，タイプによってはある方法に拒否反応さえ起こす場合もあると想定できる。こうした理解に立つ時，タイプに応じた体育の教授方法が指導者の経験の中から試行錯誤の努力で開発，確立されることが望まれる。また，ある立場からみて好ましくないタイプ，価値観を，正課体育の授業を通じてより望ましい方向へ転換していくことが可能であるかどうかこの点についての検討も少なからず重要な実践上の課題であろう。

謝　辞

最後に，本研究の最も肝心な価値観についての分析を行うにあたっては，東海大学の川上和久先生の献身的お力添えをいただいたことをここに記し，その学恩に心より感謝申し上げる次第である。

参考文献

1．飽戸弘，松田義幸編，『ゆとり時代のライフスタイル』，日本経済新聞社，1989
2．宇土正彦，『体育管理学』（改訂版），133頁，大修館書店，1983
3．江田昌佑他14名，「正課体育4年間履修に対する筑波大学学生の意識」，『大学体育研究』，第8号，19－119頁，1986
4．大木昭一郎他6名，「大学正課体育における科目選択行動」，『大学体育研究』，第12号，53－66頁，1986
5．椿本昇三，「運動生活階層別にみた筑波大学学生の健康への意識と体力・運動能力との関係」，『大学体育研究』，第5号，65－72頁，1983
6．松下雅雄他1名，「筑波大学生の正課体育への対応状況」，『大学体育研究』，第5号，51－61頁，1983
7．山川岩之助他，「筑波大学生の運動生活に関する調査」，『大学体育研究』，第6号，63－104頁，1984
8．寄金義紀他1名，「運動生活の実態と正課体育履修」，『大学体育研究』，第4号，188－198頁，1982

註

各コースの種目構成については本巻末尾掲載のアンケート調査票を参考のこと。